

# 甲府動物園を、昔も、今も、 未来も、動物も人も大切にする 平和と憩いのシンボルに

レポート 2018年3月5日

甲府市議会 山田 厚

## 甲府動物園は全国で最も古い動物園の一つで来年100周年です

甲府動物園（甲府市立遊亀公園附属動物園）は、**来年の2019年**に100周年を迎えます。全国の動物園で1番最初は上野動物園ができましたが、甲府動物園は現存では4番目の歴史を持つ1919年〔大正8年〕にできました。

公園となる土地は、一連寺の所有地が山梨県に移譲され、それが1917年〔大正6年〕に甲府市のものとなりました。当時は森のような公園だったと言います。

## 動物園の原型は市民の動物への憩い場であり、市民の協力から出発

「周辺の人たちが家で飼っていた小鳥やリスをカゴに入れて木陰に持ち寄り夕涼みを楽しむ光景がよく見られた。それはいつしか**公園の風物詩**にもなっていたようで、市もそれを見て鳥舎を設置やがて猿舎も置いた。これが現在の動物園の原型ではないか」（山梨日日新聞『動物園70年の歩み』）

甲府市は、寄付金をもとに1921年～1922年にかけて動物園の設計・建設され本格スタートしました。市内の有志から猿やツル、小鳥が寄付されたものから飼育動物を集めたそうです。動物園は、樹木とボートも浮かべた池と動物の市民の憩いの場として、楽しまれ大切にされてきました。

## 戦争はいのちを奪います、動物のいのちも奪われました

日中戦争から太平洋戦争に向かい、動物園も大変になってきました。池はコイを養殖して食糧難の市民に配給しました。

全国の動物園と動物に悲しい出来事がはじまりました。太平洋戦争が迫った1941年〔昭和16年〕陸軍東部司令部から上野動物園に対し飼育動物

の非常時における対策要綱を出すように指示が出ました。上野動物園では『動物園非常処置要綱』を提出しました。これは戦争中において動物園の「猛獣が逃げて被害を及ぼすのを未然に防ぐこと」を目的に動物を殺してしまうことです。

この「**戦時猛獣処分**」は1943年〔昭和18年〕に東京都の行政機関から殺処分の命令があり上野動物園からはじまりました。ゾウやライオンなど薬殺や射殺、絞殺、刺殺、撲殺、刺殺、絶食により処分しました。このことはゾウの花子トンキーなどのいくつかの物語として書かれています。

上野動物園には『動物よ安らかに』という慰霊碑があります。1975年（昭和50年）の園内改修時に新たに建立されたもので、この碑は猛獣殺処分の犠牲となった動物の慰霊も兼ねているそうです。

**全国の動物園でも殺処分がはじまりました。サーカス団**所有の動物も警察署長の命令で処分が行われました。いわゆる「猛獣」だけではなく蛇や野牛、カモ・・・なども対象でした。

## どうしてこのような惨いことが行われたのでしょうか？

行政機関の大義名分は「空襲時の猛獣の逃避で国民に危害があつてはならない」でした。しかしそれだけではありません。1943年からはじまった『**畜犬の献納運動**』（もっぱら軍用の毛皮のために、または肉も、猫も対象）もありました。これもいくつかの物語にされています。当時は「この食糧難の時代に犬猫にエサを与えてどうする」「（犬猫の）肉と皮は有効に利用すべき」などの強制的な動きがあつた時代です。「欲しがりません 勝つまでは」「一切の“無駄”を排除、節約」の時代です。また「**国民の戦意高揚と本土決戦への覚悟**」という非常時の意識を徹底させるためにも行われたと思われま

（参考 獣医師会の森徹士氏の「戦時猛獣処分の真相に迫る」）

動物を大切にしていた関係者の苦しく悲しい気持ちは大変だったと思われま

## 甲府動物園の関係者による殺処分をしない真剣な努力がありました

昔のいくつかの『甲府市史』には「太平洋戦争の激化にともなつてこれを処分」〔昭和39年版〕などと殺処分したとしていますが、これは事実と違うようです。『甲府市史』平成2年版以降では正しく記載されています。

市民の努力で始まつた甲府動物園では、それなりに関係者の熱意も届いたようです。当時の動物園長を務めていた小林承吉獣医は「空襲などでオリが壊されるような被害が

ば動物も死ぬ。何も今、殺す必要はない」として抵抗しました。さらに、軍医でもあった小林さんは軍馬などの治療代の代わりに軍隊の残飯をもらい園内の動物に与えていました。ライオンは最後の1年間はコイで育てましたが……。ゾウやライオン、ヒグマなど甲府空襲の前に老衰や栄養失調で亡くなりました。〔同上の『甲府市史』〕

### 甲府空襲で動物園は焼失しました

1945年〔昭和40年〕7月6日～7日**甲府空襲**がありました。甲府空襲で最もひどい被災地区は湯田地区であり動物園のある太田町公園（遊亀公園）でした。甲府空襲では、わかっているだけで1127名もの犠牲者となりましたが、そのうちの427名が湯田地区で全体の39%に当たります。全家屋の焼け落ちて焼失率は100%です。当然**動物園も焼失**しました。

小林園長さんなどの関係者の努力で生き延びていたハイエナ、ペリカン、ツル、ヒクイドリなどが焼死しました。

〔『甲府市史』平成2年版〕。

甲府空襲の犠牲者と被害

地区名	犠牲者数	負傷者数	被災戸数	焼失率%	被災者数
富士川	74	135	1,339	71.9	6,115
琢美	191	264	2,276	97.0	9,999
相生	112	13	2,095	98.5	10,736
新紺屋	16	14	741	29.8	3,527
湯田	427	612	3,876	100.0	18,930
穴切	41	?	2,321	78.3	11,605
春日	25	49	1,749	98.3	8,325
朝日	40	32	1,375	58.2	6,027
伊勢	43	108	1,548	87.8	7,740
貢川	3	?	110	15.0	550
国母	12	?	63	9.1	309
里垣	23	10	511	43.3	2,555
相川	8	2	90	8.0	450
市外	82	—	—	—	—
住所不明	30	—	—	—	—
合計	1,127	1,239	18,094	—	86,868

犠牲者数は昭和49年7月調査分。

### 動物園の再建の歩みも関係者の努力からはじまりました

戦災後の動物園の再建に踏み出したのも、行政ではなく小林園長さんやその息子さんの小林君男さんたちの「**民営で開園**」したのです。手に入れやすい県内の動物-鳥類・サル・イノシシ・ウサギも集め、無理をして動物の購入もしたそうです。また食糧難ですから苦難の中でも、さまざまな人からの応援も得ながら動物の飼料も集めたと言います。〔小林いさを『焼け野原に理想郷』山梨日日新聞1975年7月1日〕

甲府市は小林園長に動物園を貸与していましたが、この関係者の努力のおかげで**1952年に市営で再開**したのです。昭和29年市民による「ゾウを贈る会」も設立され、駐タイ国大使の斡旋でゾウが動物園に贈られました。

## 100周年となる甲府動物園の未来はどうなるのでしょうか？

甲府市は100周年を迎え、**大規模なリニューアルを計画**しています。しかし当初32億円とも言われる大規模な計画のために構想が様々となり、いまのところ具体的には進んでいません。リニューアル開始日程も明らかではありません。

大規模な建物の工事だけでは、動物園の環境を歪める大型公共事業となってしまうかれません。何よりも動物と子どもをはじめとする市民のための動物園を目的とするリニューアルでなければと思います。

**今、動物園の人気は大きくなっています。**駐車場の整備もありますが、入場者の数からも分ります。平成28年度では13万3288人でした。かつて人口が多く子ども数も多かった昭和の後半でも10万人から11万人ほどでした。

ぜひとも、動物のために子どもと市民県民のためにリニューアルを進めてもらいたいものです。

また、私は**自治体議員として要望**していきますが、動物のためにも**予算の充実が不可欠**です。これだけ人気のある動物園なのに、今の予算は少ないと思います。獣医さんを複数に、修繕費などの費用も、レッサーパンダのための飼料代や園舎改善などの充実が必要です。これからのリニューアルまで待つのではなく、今現在こそ必要です。

また、もっと市民の応援をいただきもっと動物を大切に作る気運を作っていただきたいものです。100年も前から街中にあり市民と関係者の努力で誕生し、殺処分もしないで、戦災後も「民営で開園」した動物園であり、今も、高い人気のある動物園です。これからも**市民の応援も**いただくべきです。「動物園ボランティア」「動物ご案内つかまつり隊」があってもいいではないですか。さらには、複数の獣医さんが確保されるなら**動物に親しむ学習会**です。「子ども動物学習会」「レッサーパンダ教室」「ゾウのテルさんを知る会」の開催もできるはずです。

今を大切に、そしてしっかりリニューアルに向かうべきです。

年度別入場者

	入園者数	入園料	備考
平成29年度	114,892	19,837,580	H30年2月末現在
平成28年度	133,288	21,040,970	
平成27年度	132,826	21,085,930	
平成26年度	117,993	18,822,530	
平成25年度	110,372	16,144,645	
平成24年度	114,806	16,933,000	
平成23年度	116,023	17,273,975	
平成22年度	112,430	17,370,245	
平成21年度	123,600	18,311,285	
平成20年度	118,342	17,256,550	
平成19年度	116,810	17,137,785	

※入園者数は、入料の免除・減免者及び無料開園の人数を含む

甲府市立動物園は六十四年に満七十歳となり、甲府市は市制施行百周年を迎える。戦火を浴び、復興から繁栄への道を歩んだ市民に、動物たちはいつも愛さようを振りまいてくれた。耳の裂けた巨象、戦後初のライオン富士子、子象のソム、カバののん子、レッサーパンダのリンリンーなど、思い出の中に深く刻まれ、そして今、園の移転が話題になっている。市民の記憶を手掛かりに、動物園の足取りを追った。

八中村 誠記者

# 甲府市立動物園 付属動物園

「父（第二代園長小林承吉氏）に聞いたのだが、遊亀公園には大正八年ごろ、園の周辺の人たちが、家で飼っていた小鳥やリスなどをかごに入れて木陰に持ち寄り、夕涼みを楽しむ光景がよく見られた。それはいつしか、公園の風物詩にもなっていたとまで、市もそれを見て、鳥舎を設置、やがて猿舎も置いた。これが現在の動物園の原型ではないか。」

戦前から父を助け、戦後も

## 産 声

動物園の嘱託獣医をしたこともある小林君男さん（左）甲府市丸の内二ノ三ノ一、小林家畜病院長は動物園の始まりをこう語った。

大正7年、市へ

遊亀公園は明治初期まで一

連寺の所有地で、その後、県に譲渡され大正七年市のものになった。そのころ、遊亀公園は家畜病院長は動物園の始まりをこう語った。大正7年、市へ

## 小さな鳥舎が原点に

全国6番目の開設

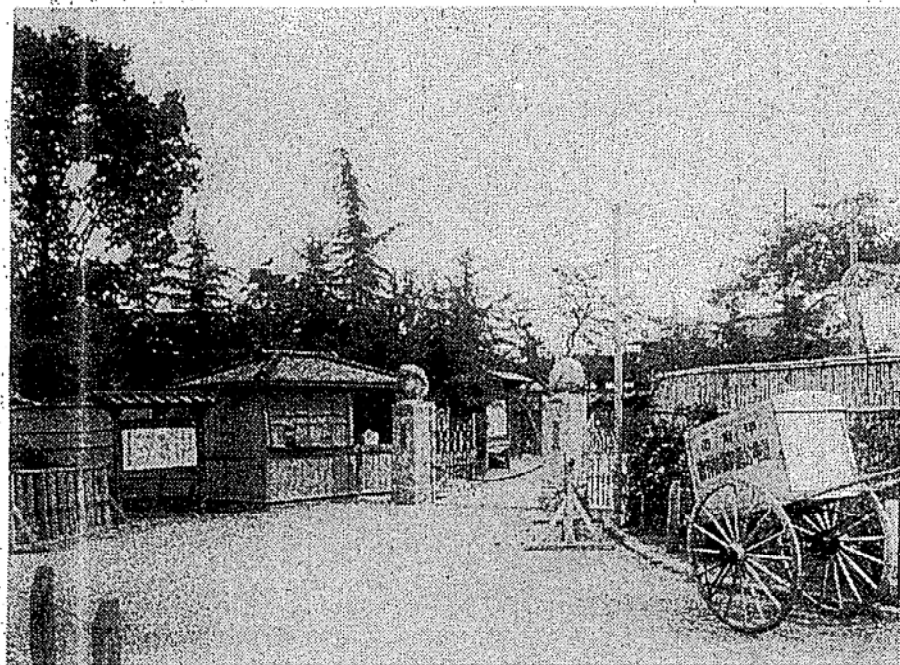
明治十五年、東京・上野に農商務省博物館博物館の付属施設として全国に先駆けてスタートした上野動物園から数えて六番目（現存では五番目）の動物園の誕生だった。

ちが水をせき止め、米をとく姿が見られた。稲積神社

にむかう道沿いには一軒の茶屋が、大きなフジ棚とだんごを名物にしていた」と回想する。

大正八年、市は公園整備に着手する。詫間さん一家にも立ち退きが命ぜられた。翌年までに市は、公園内に不造平屋の事務所、あずま屋、滑り台、鉄棒、手まり台、シーソーなどを設けた。森が公園となった。このとき、現在の南公民館付近にクジャク舎（木造亜鉛板ぶき）ツル舎（金網張り）が新築された。

スタート間もない昭和初期の甲府市立動物園



「題字は昭和五十四年、飼育係の日野原芳文さんが退職記念に寄贈し、六十年まで園入り口に立てられていた看板から」



昭和六年の満州事変以来、拡大する戦局の中で、市内商工業者は長引く不況に、農家は低迷する生産高と価格の高騰に疲弊し切っていた。十五年「麦類配給統制規則」「臨時米穀配給規則」「米穀管理規則」などが公布され、市民生活に厳しい食糧関係の統制が敷かれた。

こうした中で、太平洋戦争開戦を目前にした十六年十一月二十日、市から一枚の



回覧文書が町内会に配られた。

水辺で安らぐ市民

「現在、食肉魚介類は不足している。このため、食料増産の一翼として遊亀公園で養殖してきた成長ゴイを食用として食せんに供したい。左記の通り小売りするので、隣保組を通じて周知しておいてほしい。なお、一匹でない人は、隣保組の中で希望者をまとめて一匹として申し込んで

## コイを養殖

ほしい」。文書はこの内容をいかつい漢文調で記している。

池の水は澄み切っていた。荒川三ツ水門から引かれた水路は、市中を東西に横切り、一

連寺南から池によどみないせせらぎを落としていた。敷し、五ヶ角のぶが売られていた。一個五銭だった。若い軍人集う市民に一時の安らぎを与えた。公園内で軍事教練に汗を流す若い軍人らにも同じだ

は投げて楽しんで。当時、売店には長さ三十

## 食糧難の市民に配給

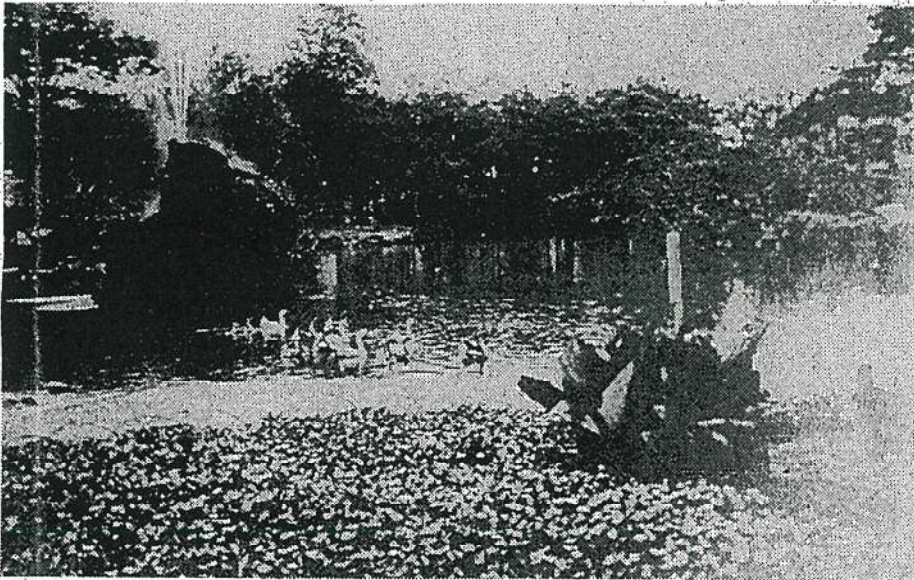
の投げるえさに食いついた。回覧文書によると、コイの配給は十一月二十八、二十九、三十の三日間、一人当たり七・五から十八・八時までとされ、三時当たり三十八銭で引き渡された。

昭和十年代は早くから市内の町内会、隣保組の代表らがバケツや新聞紙を持って長蛇の列。ひと抱えもあるコイが手渡され、家路を急いだ。

### 動物殺害説を否定

七十年近くたった今、コイを竹製のすのこの記憶は多くの市民から薄れ子で仕切っようとしている。また多くの誤解も生じている。「動物園のは小林園長や動物は戦争が厳しくなっか飼育係たち。荒川へ連れていって全部殺したんだ」ある市民は言う。えさは、市内の製糸工場からカイコのおさし、当時、父小林承吉園長と苦菜をともにした小林君男なを調達した。氏は「ほとんどが老衰または衰弱死だった。特に、大正末年と午後四時に宮内省から下賜されたライオンは、最後の一年をコイで育てた」と語り、「甲府市史」にも記された動物殺害説を否定している。

## 70年の歩み



澄み切った水と緑の松林は、市民にひと時の安らぎを与えた。



焼け野原に理想郷を―小林承吉、いさを夫妻の動物園再興にかけた願いだった。

昭和二十年七月七日、甲府市民は前夜の空襲という悪夢から目覚めることなく、絶望のふちをさまよっていた。小林園長一家が避難先である敷島町の知人宅から、動物園に戻ったのは同日午前十時ごろだった。

「一步、動物園に入ると、焼死した鳥類、小動物、傷ついた

### 甲府市五反田公園 付属動物園

猿が木陰にいたり、園内を右往左往していた。辺り一面焦土と化して、はるか向こうに甲府駅が見える。悲惨な光景である。公園や動物園のどこどころに赤茶けた樹木が立っていた…。いさをさんは、五十年七月一日付の山梨日日新聞「私の五十年」の手記にこう記している。

焼け残った樹木

小林園長は早速、当時の市

## 終 戦

長、野口二郎氏や市議会議員らに動物園再建を掛け合っ

「私財をすべて投じても動物園を建て直してみせるぞ」。小林園長の決意は固かった。焼け出された人たちの住宅確保。さらに、市街地全体の復興

り。ほとんどが焼けてしまった。しかし、幹の一部が焼けず、根気よく手入れすれば息を吹き返す黒松はかなりあった。しかし、こうした木はバラツク小屋の材料としても最適

# 再建へ緑の環境づくり

で、日を追うことに一本二本と初り到着した。NHKラジオカーのスピーカーから、終戦を告げる玉音放送が流れていた。

フジオの玉音放送

八月十五日、動物園入り口にあったコンクリート製の亀の石碑前に人垣ができていた。NHKラジオカーのスピーカーから、終戦を告げる玉音放送が流れていた。

私われ、ライオン舎住まいた光景だが、親子五人が、おにだった小沢きぎりの配給を受けていた。し

「夜中にミシ食べれない。そのうち父親がミシという音捨てていこう。母親が、いやがして、るうだ」と言い二人で泣いていた。その灯を頼翠朝、その弱った子供が死にりに近寄っての横に寝かされていた。遠くみると顔見知るの音が木を切っていた。うごうした光景は二度と見たことのない。聞き取りにくいラジオの音声を耳にしながら強く願っていた。

廃墟と化した甲府市街地



## 70年の歩み

6



# 戦下で学んだ救命心

今、空前のペットブームを迎えている。人気を支えているのは、ダックスフントやチワワなどの外国産犬。終戦直後、各地に駐留した米進駐軍が持ち込んだのがルートと言われる。

甲府市丸の内二丁目にある小林動物病院の前院長、小林君男さん(75)は当時、舞鶴城公園内にあった進駐軍宿舎で上官たちが飼っていた犬の往診にたびたび出掛けた。犬を連れて(米国に)帰れない。処分してくれ。

## ペットとの「共存」願う獣医師

### 小林 君男さん

進駐軍撤収の際、薬殺による安楽死を求める上官に、こう答えた。「学校で治療法は教わったが、殺すことは習っていない」。代わりに日本人の里親を探して、紹介した。

父親が開業した動物病院を継ぐため、旧制甲府中を卒業後、東京・麻布獣医畜産専門学校の間をくぐった。終戦を控えた一九四五(昭和二十)年の春だった。空襲警報の鳴る回数が日増しに多く

なり、日本が敗戦に近づいていることを何となく感じていた。夏には東京と甲府で空襲に遭い、焼夷(しょうい)弾の雨の中、死と隣り合わせの恐怖を何度となく体験した。

父親は開業医の傍ら、甲府市立動物園長を務めていた。戦争末期、戦火による混乱で猛獣が逃亡するのを懸念した国が大都市の動物園に殺処分令を出した。「空襲などおりが壊されるような

被害が出れば動物も死ぬ。何も今、殺す必要はない」。お上(お上)に盾突くなど考えられなかった時代。小林さんは父親の言葉を訴える人も目立つよう葉に、医師としての気概を感じた。

終戦を挟んで学校を卒業。父親が動物園の再建に専念していたため、一人で病院を切り盛りした。けがや病気、事故で運び込まれてくる瀕死(ひんし)のペットたち。戦時中、深刻な食料不足から餌を与えられず次々と死んでいった犬の姿が脳裏に浮かんだ。ペットにも訪れた平和な時代。「命を救い、できるだけ長く生かしてあげることが与えられた役目」。そう言い聞かせて治療に当たってきた。

現役を退いた小林さんは今、空前のペットブームが気掛かりだ。飽きたり、手に余って必要なくなるという理由で動物園の動物を処分していった「あのころ」と同じに映る。

「一つの命を預かったからには、いつまでもともに生きようという気持ちでいてほしい」。元獣医師の願いは、人間とペットの関係だけに終わらないメッセージとして響いてくる。

# 昭和20年卒

わたしの戦後60年

8



病院に来たキャバリア犬を抱きながら、歩みを振り返る小林君男さん  
＝甲府市丸の内2丁目

核家族化や晩婚化が進む近年、ペットを「同居者」や「パートナー」と

考えるオーナーが増えている。一方でペットの死後に喪失感で心身の不調が起る「ペットロス」を訴える人も目立つようになった。動物の習性や飼う方に関する知識が乏しく、飼いきれずに捨